淑徳大学研究紀要（総合福祉学部・コミュニティ政策学部） 45 371－390，2011

研究ノート

バリの風土と家系についての考察（XI）

松 原 正 道※

序

「大東亜（太平洋）戦争」において，作家，画家，新聞記者等の知識人･文人がこれに関わり，積極的に，また，消極的に戦意昂揚に資したのである。

こうした知識人･文人の中には軍政下のバリ（島）を訪れた者も少なくなく，それらの人々の中には作家の佐藤春夫氏の様にバリ（島）訪問に際して，渡航許可を得るための手続きにおいて，担当の海軍士官の官僚主義に辟易させられた者もいたのである。

陸軍にしても海軍にしても軍人は国家の官僚でもあり，高級軍人であってもそれは例外ではなく，その官僚の持つ一面として，事にあたって前例主義に陥ったり，責任回避に走ったり，自らの権限を笠に着て許認可において引き延ばしをしたり，時に，賄賂を得たりする等と言う事は古今東西を問わない官僚の特質でもあると言えるのである。

従って，戦時下，物事を迅速に処理しなければならない時でも，自らには緊迫感がない者が佐藤氏に対して何かと言っては引き延ばし嫌がらせをし，その立場を誇示したわけである。

戦意昂揚のために軍の要請に従っての従軍であり，作家の久住十蘭氏の例で見られる様に軍刀を持ち軍人と共に撮った写真が残されていると言う事で，肩章・襟章がないのでその地位は明確ではないが将校待遇だった事は知れるのだが，そうした将校待遇の知識人・文人に対して，対応した軍人が自らの優位な立場を示すためにとった横柄な態度だったのである。そこには，「合理」は働かないのである。

それと相俟って，陸軍と海軍との連携のまずさ，それも確執とも言うべき関係，これは，今日でも言われる堅割行政に通ずるものでもあり，平時には行政の停滞・非合理・無駄と言う事ですまされる面もあるが，勝敗を求められる戦時にあってはそれが許される余裕はない。その上，拙稿IXの162頁でふれた「ニューギニア死の行進」に見られる参謀達の机上での作戦を実戦部隊に強要した結果，損耗を大きくしたものであって，そこには，多くの人命が失

※名誉教授

われると言う結果が伴っていたのである。

その上，大東亜（太平洋）戦争の時にもその後の時代にあっても，官僚機構には構造的に責任の取り方が不明確で，結果的に物事が有耶無耶になってしまうと言わざるを得ない側面があり，上位者へ行けば行く程それが不明確になってしまう構造も否定出来ないと言うものを持っていると言う事も指摘されるところである。

尤も，須く，人の為せる事であり，全てそれに関わる人の人柄によるのであって，上記の如き体（本）質を以て進められた大東亜（太平洋）戦争ではあったが，当然の如くその掌にあたった者の人柄，資質によってその対応も違ってくるので，それも古今東西を問わず言える事でもある。

戦時下のバリ（島）で日本軍の上陸に積極的に手を貸し，その後，日本（人，軍）とバリ（島）の人々との間に立って働いた日本人として，それが必ずしもバリ（島）の人々のためにならなかったとして，敗戦と共に責任をとり自決した三浦襄氏を中心とする，バリ（島）に関わった日本人について考察する事が本稿の主題である。

本論

Ⅰ

「オランダ時代は，食べ物や服で苦労することはありませんでしたが，私たちに民族の誇りはありませんでした。私たちは，全てオランダ人に命じられるがままに動かなければいけませんでした。

一方，日本時代は食べ物がなく，着る服にも事欠き，人々は貧しい暮らしを強いられ，大変厳しい思いをしました。

しかし，それは戦争に勝つためでした。日本も必死だったのです。厳しくやらなければ，日本が白人と肩を並べてやっていくことは出来ませんでした。それを私たちは教わりました。植民地時代の気持ちのままでは，とうてい独立など出来るものではありませんでした。（中略）日本だけが，アジアを支配し続ける白人に立ち向かっていったのである。

私は，日本が真珠湾を攻撃し大打撃を加えた時，アジアの国にそれが出来たことを誇らしく思い，自分自身の中の強さを感じました。また，アメリカという国も特別なのではなく，他の国と同じなのだということが分かりました。

アジアは劣っていないのだと思ったのです」(1) と言った記述，そして，また，「私はPETAの将校になるために，ほぼ一年間，郷土防衛義勇軍幹部教育隊で訓練を受けました。その時の私たちの中隊長のことを，生徒全員が尊敬していました。私も非常に尊敬していました。

それは進藤一馬中尉殿のことでした。その中隊の指導者たちはみな実際に中国戦線で戦っ

た歴戦の勇士たちで，進藤中尉殿も指を何本か失っていて，私たちの敬礼に答礼する時によくそれが見えました。

進藤中尉殿は決して私たちを殴ったりビンタを張ることはありませんでした。他の中隊では，毎日，そして毎時間誰かがビンタをされていました。

また，中尉殿は私たちに対して一度も罵声を浴びせることもしませんでした。生徒たちと一緒に苦しみを分かつという教え方で，指導中は自ら率先して見本を示していました。彼の，本気で教えるという姿勢がよく私たちにも伝わってきました。

それは，敵を憎むという教育ではなく，みなで団結し協調しながらやっていこうというものだったので，彼の教えを受けた者は独立戦争後のインドネシア政府において最も活躍しました。私たちは彼のことを父と感じていました。」(2) と日本軍政下，日本（人，軍）と深い関わりを持ち軍政監部宣伝部やラジオ放送局に勤務，独立後，ヨーロッパ各国の大使となった1919年ジャワ（島）のサラティガ生れのM・ユスフ・ロノディプロMr. M. Jusf Ronodipuro氏の記述や，日本軍が設立したインドネシア人の軍隊，郷土防衛義勇軍（PETA）に参加し，小団長となり，インドネシア独立戦争中はゲリラとして活躍，インドネシア国軍中将となり，国連大使にもなった1927年ジャワ島ブルオカルト生まれのプロボ．Ｓ．スウォンドLt. General Purbo. S. Suwondo氏等の記述にその例が見られる，日本（人，軍）に対する信頼感，期待感の強さを認識させられると共に日本（人，軍）の現地インドネシアの人々への対応の在り方の一面を垣間見る事が出来るのである。

そして，それは，更に，「日本占領下で，私達の学んだことの一つが『団結』ということでした。それまでのインドネシアはアンボン人，マナド人，アチェ人，バタック人，ミナン人，ブギス人などがバラバラになっていたのですが，それが，団結し一つになったのでした」(3) と言うプロボ・スウォンド氏の記述に見られる様な，更なる展開を見せたのである。

そして，「団結し一つになった」事に大きな役割を果したのが，次の記述に見られる様に，日本（人，軍）によって奨励され普及していったインドネシア語だったと言うのである。

「日本軍はインドネシア語を公用語にして，オランダ語を話すのを全面的に禁止しました。（中略）オランダ時代のインドネシアの人たちでインドネシア語を習ったというのは，バンドゥンとかチルボンのような大きな都市の人たちだけでした。

ジャワ島の地方では，一般の人たち，たとえば農民たちはインドネシア語よりもジャワ語を習いました。それで，みなインドネシア語を知りませんでした。（中略）オランダ時代には，学校を出てもインドネシア語が分からない人がたくさんいました。学校で教えなかったのです。それはオランダ人の政策でした。

インドネシアには三百以上の言葉がありますが，それを統一させませんでした。それで，インドネシア人を団結させないようにしたのです。

ジャワ人にはジャワ語だけを習わせました。それを，日本の軍政監部が変えて，どこの地域の人でもインドネシア語だけを習うべきと命令を出したのでした。

それでインドネシア人同士の意思が通じるようになって，インドネシア独立の意識が広がるようになっていったのでした。」(4) と言う，1922年，ジャワ（島）ボゴールBogorに生まれ，日本軍政監部人事課に勤務後南方特別留学生として，広島文理大学（現･広島大学）に入学，理科の授業中に原爆を体験，戦後，慶応大学を卒業，帰国後は日・イ貿易に従事し国会議員となったハッサン・ラハヤR. H. M. Hasan Rahaya M. A. 氏の記述へと繋がるのである。

それは，後に（1945年の憲法で）共通語とされたインドネシア語，バハサ・インドネシアBahasa Indonesiaと言われるものになるのだが，これが，それ迄それぞれ個有の言語を持っていたためジャワ人，アンボン人，ブギス人等と言われていたインドネシアの人々に意思の疎通を行わせると共に，民族としての意識・自覚・誇りを持たせ，その団結をも促し，やがて，独立への途を一段と進めさせたと言うインドネシア語の普及が，日本（人，軍）によって奨励されたと言うのである。

これは，共通の言葉，言語を持つ事によって生まれる民族としての意識・自覚，それは，ひいては，誇りにも繋がると言う事の一例だったと言えるだろう。

これについては，元来，共通の言葉がなかったと言われている台湾で，植民化された後，日本語が使われる様になった事で以て，台湾の人々の意志の疎通が可能になったと言う話と通ずるのであるが，これは，現在，多くの日本人にとっては余り考える事のない，言語を以ての民族の団結，時に，国家の統一がもたらされると言う事を考えさせられる一例と言えるだろう。

だが，これは，一方では，他（多）民族に一つの言語を強制した歴史にも繋がるのである。そして，また，現代社会において，共通語を以て統一して来ていた多言語を内包する国家から，同一言語を持っている事で以て分離・独立していったが，そのために混乱を生じ民族の例があるが，それとは裏腹の話と言える。

そして，インドネシア語の奨励と普及に付随し，それに大きく貢献したものとして，日本軍政下でのインドネシアの人々に対する教育の奨励と普及があったと言う事で，それによって，多くの子供達が学校へ通う事になり，それが共通語としてのインドネシア語の普及を助長したと言うのである。

「日本の軍政監部は，学校を作りなさい，中学校，高校を作りなさいと，どんどんと教育に力を入れていきました。日本の軍政の三年半の間に，十万人のインドネシア人を教育したと言われています。（中略）オランダ時代は，例えばボゴールには中学校はたった一つしかありませんでした。それが，日本軍が来てからボゴールだけでも十校，二十校と作っていきました。（中略）ジャカルタではもっと沢山の学校が作られました。

また，オランダ時代には，大学はインドネシア大学と，農林関係のボゴール大学，それと，工業関係のバンドゥン工科大学の三つだけでした。インドネシアの全国で三つしかなかったのです。

中学校以上の学校はみなオランダ政府の学校です。それも，あまり教育を広めることをせず，そこに入学出来る人は非常に限定されていた」[6] とハッサン・ラハヤ氏の記述に見られるオランダの政策に対し，日本（人，軍）のそれは，インドネシア各地に学校を設けて，教育を奨励する事で以てインドネシア語を習得させ，彼らにインドネシア人としての意識・自覚を持たせ，ひいては誇りを持つ事によって独立を目指させる事になったわけである。

これは，日本（人，軍）の側から言わせると，彼らの協力を得る事で以て戦争を遂行し，やがては，勝利をもたらすためのもの，場合によると方便だったわけではあるが，当のインドネシアの人々にとっては，自らが目標とする様になった独立に対して，日本（人，軍）が行った施策には脱オランダと言う点で，自分達が望むものでもあったため，積極的にこれに参加，協力する者もいたわけである。

その点では，拙稿IXでもふれた「大東亜共栄圏」構想にしても，日本の意図とズレはあったものの彼らには容認，利用出来るものだったと言えるのである。

こうした独立を目指すインドネシアの人々にとっては，日本（人，軍）の行うオランダ色を払拭すると言う施策は，基本的に自らの持つ方向性と合致するため，そこに多少の齟齬があったとしてもこれを受け入れ，積極的にこれに協力する事になったわけで，戦争を遂行するための日本（人，軍）による一面の厳しさはあったとしても，日本（人，軍）の協力・指導によって独立の達成を画ろうとするインドネシアの人々にとって，食糧が不足したり，衣類に苦労をしたとしても，それは，日本の勝利，ひいては自らの独立の達成のために我慢する事が出来るものだったと言うのだ。従って，食糧，労務者問題が後まで尾を引きはしたが，一面，軍政は，必ずしも悪い点ばかりではなかったと言われるところである。

特に，バリ（島）においては，陸軍占領下の憲兵，海軍々政時代の特別警察（特警）の厳しさについてはドクター・グデ・グリアも言っていたところであるが，一面，それによって，バリ（島）においては犯罪が減ったと言う事も事実であって，これはクランビタンの領主の一人だったオカ・シラグナダ氏も言っていたところでもある。

この点に関してはジャワ（島）でも同じで，「私たちも憲兵隊のことを大変怖がっていましたが，一方で，彼らがいることで治安と秩序が保たれていることも分かっていて，平和に過ごすことが出来ました」[10] とユスフ・ロノディプロ氏も述べているのである。

その上，バリ（島）では何としても，日本（人，軍）によって殺された者がいなかったと言う事である。

物事の受け止め方，理解の仕方はそれをする者の人柄，資質，その立場によって違ってく

る。その点で，上述の人々は日本との関わりが強かった事もあってか，日本（人，軍）に対する受け止め方は好意的だったとも言えるのである。

そして，軍政の在り方については，「統治政策を実施するにあたって，軍当局は，次の三つを基本方針にした。すなわち，①戦争に勝つために住民の支持を得るように努め，公共の秩序を守ること，②既存の行政機関を最大限利用すること，③この占領地を『南洋』の食糧供給の中心地にすることを目指して，必需品の自給を達成できるような土台を築くことの三点である」(7) と言われるものではあったのだが，「日本の占領の密度の濃さは，インドネシア群島全域では，かなりのばらつきがある。また，日本の権力や文化がどれほど浸透したかについても，均等ではない」(8) と言う指摘に見られる如く，広い地域にわたるオランダ領東インド（インドネシア）だったため日本軍による占領政策は単一的ではなく，地域によってその濃淡があったと言うのである。

そう言われる中で，「日本に占領されたインドネシア群島地域は，大きくふたつに分割された。スマトラとジャワの両島は，陸軍の統治下になった。そして，カリマンタンと，かつて『大東部』という名で知られていた地域は，海軍に統治されることになった」(9) と，そして，「海軍の占領地域における民政府の中心はマカッサルに置かれ，ミンセイフ［民政府］とよばれた。マカッサルの民政府の下には，バンジャルマシンに中心を置くボルネオ民政部，メナドに中心を置く北スラウェン民政部，アンボンに中心を置くセラム民政部，そしてシンガラジャに中心を置く小スンダ（ヌサ・トゥンガラとバリ）民政部が置かれた」(10) と言われる様に，バリ（島）は，同島北部のシンガラジャに本部を置く小スンダで民政部の管轄となったのである。

それを目指すインドネシアの人々の独立についての考え方の根底に存するものとしては，「インドネシア独立にとって大変重要な出来事が一九〇八年にありました。それは，『プディ・ウトモ』というインドネシア民族の再覚醒を促す会議です。もちろんこれはオランダ支配という制約の中でのものですが，ここでインドネシアの独立という考え方が生まれたのです。（中略）そしてこの『プディ・ウトモ』は，インドネシアの知識人たちが日本の模範を見たことから始まったのです。

その模範とは，一九〇五年に日露戦争で，東郷元帥が対馬沖でロシアの艦隊との戦いに勝ち，日本がロシアに勝利したことです。この勝利によって，インドネシアの知識人たちの間に民族主義的な感情と愛国心が芽生えたのです。

ロシアの強大さはよく知られていました。そのロシアに対して日本が戦いを挑んでのです。日本は明治維新によって力を付け，白人の国の艦隊に打ち勝ったのです。

『アジアの国にもそのようなことが出来るのだ』と分かったのです。日本に出来るのならば，どうして同じアジア人である，私たちインドネシア人にできないことがあろうかと考えたの

です。インドネシア人がそのような気持ちになったのは初めてのことでした。

日本がインドネシアに上陸し，オランダを追い出した時に，同じような考えが私の中に生じました。『日本にオランダを追い出すことが出来るのならば，私たちインドネシア人にも出来るに違いない』と思ったのでした。

日本がオランダを打ち負かしたことによって，それまでは抽象的でぼんやりとしたものに過ぎなかった独立という考えが，現実的で具体的なものとなったのです」[11] と，プロボ・スウォンド氏が言うところのものがあったのである。インドネシアの人々の独立意識の覚醒について日露戦争（明治37〈1904〉－38〈05〉）における日本の勝利が大きかったと言うのである。

同様に，弁護士として日本軍政下海軍武官府との接触があり，独立後，国会議員となり国防相，パジャジャラン大学総長，高等教育・学術相，大統領補佐相になった1899年ジャワ島チアミス生まれのイワ・クスマ・スマントリ Prof. Haji Iwa Kusuma Sumantri 氏も，「父はジャカルタのタナ・レンダ地区の学校長をしていた。私はまだその雑誌を読むことはできなかったが，父がそこに載っている写真について，いろいろ説明してくれた。

写真１
乃木希典大将

写真２
乃木神社

写真３
東郷平八郎元帥

写真４
東郷神社

その写真は乃木将軍と東郷元帥の像であった。父はその二人の指導者は日本人で，一九〇四～五年の日露戦争でロシアを打ち破った軍人である，と私に語ってくれた。（中略）日露戦争はアジアの人々を眠りからよび覚した。自民族の維新の意義を正しく認識するならば，アジアの小国ですら，ヨーロッパの大国に打ち勝つことができるということを，その戦争は示していた。アジアとインドネシアのその後の政治の発展の中で，その戦争における日本の勝利の意味は，はかりしれないほど大きいものがあった」(12) と，日露戦争での日本の勝利がアジアの人々，就中，インドネシアの人々に与えた影響の大きさを記しているのである。

その点で，白人による覇権主義を同じ有色人種である日本人が打ち破った「日露戦争」の勝利は，アジアの諸民族に衝撃を与え，人々に希望をもたらした事が知れるのであって，この辺りの詳細については今後の研究課題としたい。

Ⅱ

「日本は，南方地域の石油をはじめ，豊富な原料物資を確保するため，東南アジア最大の原油地，オランダ領東インド（蘭領東印度，のちのインドネシア）への進攻を開始した。

当初，バリ島には日本軍の進駐の予定はなかったが，ジャワ進攻にあたって，米豪の遮断するのに都合がいいトゥバン飛行場が島内にあったため，計画は変更された」(13) として，「攻略隊は〇〇一五予定どおりサヌール泊地に進入，金村支隊第一回上陸部隊は0100舟艇で泊地発，至近の陸岸に上陸したが敵の抵抗はなかった」(14) と言うように，昭和17年２月18日夜から19日未明に，輸送船「相模丸」，「笹子丸」に分乗した台湾からの第48師団金村亦兵衛大佐率いる一個大隊1,000名の将兵が，バリ（島）東部のサヌールSanuru海岸への無血上陸に成功するのだった。

だが，「バリ島沖では夜明けとともに豪州から米国の爆撃機の大空襲が始まった。輸送を護衛してきた駆逐艦一隻が沈没し，乗員約六十人が死亡した」(15) と言うように無血上陸の陰にはこうした出来事もあったわけである。

この時を以てバリ（島）は日本軍の占領するところとなるのだが，その際，道案内と通訳として行を共にしたのが三浦襄氏（明治21＜1888＞・８・10―昭和20・９・７）だったのである。

「昭和５，６年頃には，バリには日本人は三浦を含める家族しか定住しておらず，デンパッサルには三浦家しかいなかった」(16) と言われる様に，明治42（1909）年４月に堤林数衛氏が主宰する「南洋商会」の社員として，22歳でジャワ（島）中部のスマランSemarangに上陸する事でインドネシアに渡って以来，薬，雑貨の行商から始まり，貿易業，タイヤ再生業，コーヒー園の経営を経て，「三浦が最後に行き着いた仕事が，自転車修理業」(17) と言われる「三浦商店」（「トコ・ミウラ」TOKO MIURA）を経営していたのだった。

三浦氏がバリ（島）上陸部隊に同行する様になった事については，昭和16年６月に帰国していた同氏に対して，「翌月，日本の南進政策を警戒するオランダ領東インド（蘭印＝現インドネシア）の総督府は，バリ島の三浦の資産を凍結してしまった。そして太平洋戦争が勃発。帰島を断念した三浦に思わぬ声がかかった。

海軍軍令部から，バリ島攻略への道案内と通訳として，上陸部隊に同行するよう命じたのである」[18] と言う経緯があったのである。

直後に戦争が勃発するにしても，オランダは自らの植民地内とは言え，未だ，交戦していない国の個人の財産を凍結すると言う挙に出ていたのである。

そこには，「明治以来，日本帝国は中国大陸北部をその国防上，経済上の生命線と考え，その延長線上に満州国をとらえ，自己の権益を守るため15年戦争を開始したが，その補給線は延び切り，武漢三鎮の占領以後は全く膠着状態であった。この行き詰りと米英との利害対立は，日米通商条約の破棄となり，その結果，南方地域の豊富な原料物資の確保が緊急の課題となった。昭和15年９月からの第二次日蘭会商は，このような背景のもとで行われたが，９カ月の交渉の後それは決裂し，連合国のABCDラインはますます日本の南進を警戒し，ついに16年７月に蘭領東印度総督府は，断行した」[19] と言った大勢と，それに伴った三浦氏等個人の資産の凍結が行われたと言った背景があったのである。

そこで以て，日本は，「宥和政策から軍事政策に転換し，９月には東インド進攻計画を発表し，南方在留邦人８千名の名簿作製にかかるなど，将来の『南方占領』に備えた基礎的作業を行なった」[20] と言う措置を取ると言った緊迫した状況にあり，こうした大勢の中で個人も翻弄され，三浦氏自身も軍と行動を共にすると言う事になったのである。

こうしてバリ（島）へ戻った三浦氏だったが，「上陸部隊は，暗闇で方向の見当もつかないなか，川を渡り，やがて広い道に出た。先頭にたった三浦は石段と気づかずに足を踏み外し，右足をねんざした。

『痛み甚だしく一時立つ能わず』と日記に書いた。突然スコールが降り出し，土砂降りとなる。

『或は先きに進み或は遅れて道案内の役を勤め，痛む足を引ずりつつ往復す。降雨甚だしくグシャ濡れとなる』（三浦襄日記）」[21] と言った道案内だったのである。

そして，「別の上陸部隊は市郊外のトゥバン飛行場に向かい，海軍航空隊が進駐した。飛行場から飛び立った同航空隊がただちにジャワ上空を制圧し，陸軍部隊はジャワ島に上陸。三月九日，三百五十年に及ぶオランダによるこの地域の支配は完全に終わった」[22] との指摘にある，バリ（島）の飛行場から飛び立った海軍航空隊によるジャワ（島）の制空権確保が，350年にわたるオランダによる植民地支配の終焉をもたらす事に資したと言うのである。

バリ（島）での占領作戦は２月末に完了するのだったが，「バリ島住民は大混乱を起こした」[23]

と言われているのである。

「ジャワでは，日本軍は解放軍として熱狂的に歓迎されたが，日本軍は，ジャワ島住民に民族旗の掲揚と民族歌インドネシア・ラヤを歌うことを禁じた。独立問題に関することは厳重にチェックされていたのである。しかし一方では，自らを解放軍として提示し，３Ａ運動（アジアの光日本，アジアの母体日本，アジアの指導者日本）を展開した。ところがバリ島では多くの住民が住居を捨てて山に逃れたといわれる」[24] と，拙稿Ⅳの147-8頁でふれた「ジョヨボヨの伝説」を持つジャワ（島）では歓迎された日本軍だったが，バリ（島）では，当初，住民は山へ隠れたと言うのである。だが，やがて，それは，その日本軍の先頭に三浦氏がいた事をバリ（島）の人々が知る事により，「三浦の旦那が来たぞ（トワン・ミウラ・ダタン Towan Miura Datan）」と言う言葉が住民の合言葉となって，「ジュンポール，ジュンポール（バンザイ，バンザイ）」の声を以て受け入れられるように変わるのだった。

「陸軍第48師団金村大佐の指揮する上陸部隊はバリ島に無血上陸し，直ちに軍政を施行した。しかしバリ島は，開戦直後の16年11月の『占領地軍政実施に関する陸海軍中央協定』によって海軍の軍政地域となっており，海軍第21根拠地隊堀内隊が金村隊と交替した。この時は，根拠地隊司令部が軍政を掌握したが，セレベス島マカッサルに海軍民政府ができ，17年８月以後，その下部組織セラム民政部が軍政を担当し，実戦部隊は作戦に専念することになった」[25] と言われる如く，三浦氏が道案内した陸軍の金村隊から海軍の堀内隊へと軍政のバトンタッチが行われるのだった。

そして，この時の堀内隊こそ，拙稿Ⅳ－148頁でふれた，メナド（マナド）へ落下傘で降下した堀内豊秋大佐とその部隊であり，軍規は厳しく，「堀内さんというのは非常に人格者のようで，兵隊をよく押えて無茶なことはバリ人にさせないというような，まあ善政を敷いたというのですな。そういうことでバリ人から信頼されておったということが，あっちこっちに書いてあります」[26] と，バリ（島）民政部で農林水産課長だった河野恒雄氏は言っているのである。

そして，また，「５月に海軍が来て，６月頃に民政部がここに支部を設けました。それがセレベス民政部バリ支部ということになったのです」[27] と言われる様に，バリ（島）に民政部の支部が設けられるのだったが，それは，その後，次の様に改組されていくのである。

マカッサルの海軍民政府の下部組織が，香料諸島と言われ大航海時代には，ポルトガルを始めとした西欧諸国が垂涎の地としたモルッカ Molucca（マルク Maluku）諸島の中央部に位置するセラム Seram 島に置かれ，その支部がバリ（島）に設けられたのである。

そして，それは，昭和19年１月29日に越野菊雄氏が初代長官として赴任する事で以て，小スンダ民政部となり，バリ（島）北部のシンガラジャ Singaraja に本部が置かれ，「昭和19年１月には小スンダ民政部という名前に改めて，バリ，ロンボック，スンバワのほかにスンバ，

フローレス，ティモールというのを全部管轄していくことになり，要するに，小スンダ列島と呼ばれるものを全部を管轄するということになったわけです」[28] と言われる組織替えが行われたのである。

その改組された民政部において三浦氏は，原氏の論文の脚注174に従えば，「三浦の身分は『部内限奏任官待遇，年額1800円』であった。これは大尉の位置に相当する」と言われる立場で同民政部の顧問となったのである。

こうした三浦氏の所へ多くの日本人がバリ（島）を訪れた際に訪ね，色々と便宜を画ってもらうのだったが，そうした人々の中に，『高安犬物語』で昭和29年に直木賞を受賞以後，動物を主題にした作品で名をなした作家の戸川幸夫氏が，東京日々新聞（今の毎日新聞）の記者時代，海軍部隊が侵攻して間もない頃，第二南方々面派遣隊（＝南遣）付海軍報道班員としてセレベス（島）マカッサルにあった，第二十一海軍根拠地隊に配属されていた時，高松宮，久邇宮の訪問直後のバリ（島）へ昭和17年８月頃最初の報道班員として渡航し，民政部顧問だった三浦氏と会うのだった。

その時の三浦氏に対する印象について20代後半の戸川氏は「老人」と記しているのである。

「三浦老人はあの頃六十くらいだと思うから，僕よりは二十七，八も年上だった。親子ほどの年齢差があるにもかかわらず，老人は僕の良き友人となって，いろいろと助けてくれた」[29] と，54歳の三浦氏が「老人」に見えたのだろう。

そして，彼らの対面には，「僕がマカッサルに居たとき，三浦老人の友人である山崎市長が，もしバリ島に行くことがあったら，三浦さんを訪ねなさい。非常に親切な男で，バリではたいへん顔が利くのだから，と詳しく話してくれていたからである」[30] と言う経緯があったのである。

「歌と踊りの島としての予備知識は日本を出発するとき，多少は仕入れてきたが，そんなことよりも，回教徒のインドネシアの真只中（まっただなか）で，どうしてこの島だけがヒンズーの国であろうか，きっとおもしろい民族や変わった風習が見られるにちがいない。最初の日本人記者として探訪するなら，きっと素晴しい特ダネが取れるだろう―これが現地に来てからの，僕のバリ島行きを熱望する理由だった」[31] と言う戸川氏が，視察に行く軍司令官との同行を副官に申し出ると，ここでも海軍々人である副官による官僚主義的対応に辟易させられるのである。

「海軍部隊がジャワ島に進出して間もなくであった。配属部隊の視察をつづけていたＫ司令官の一行が，今度はバリ島に行くというのを聞くと，僕は副官に同行を申し出た。すると副官は皮肉な笑みを浮かべて，

『バリ美人の裸が見たいのか，司令官と同じことを考えてるのう。だが，飛行機の搭乗者が満員だから駄目じゃよ』と無下に断った」[32] と言うのである。

ここで，副官が上司である司令官の行動について批評（判）している事を以て，戸川氏は，その軍規についてふれているのである。

戸川氏の来島に先立って，その直前の昭和17年５月４日には海軍に所属していた高松宮宣仁殿下，同年６月17日は同じく海軍々人だった久邇宮朝融王がバリ（島）に視察に来るのだが，三浦氏はこれを迎え島内を案内するのだった。こうした彼を原氏は，「そしてこの頃，高松宮，久邇宮などの皇室がバリ島を視察に来た。三浦は彼らを案内したが，彼はこのような仕事を非常な光栄と感じたようだ」(33) と言うのである。

こうして，バリ（島）を訪れる日本人に対して色々と便宜を画ったのだが，彼は，常に，日本（人，軍）の支配下にあるバリ（島）にあって，日本（人，軍）とバリ（島）の人々との間に立って，バリ（島）の人々の立場に意を用いて行動するのだったが，日本（人，軍）の無理解，時に，横暴さに腹立たしい思いをしながらも，両者の間に立って仕事を続けたのである。

こうして，三浦氏の存在が今後日本（人，軍）とバリ（島）の人々と間で大きな役割を果すのだが，その人となり，そして，如何にしてバリ（島）の人々と関わる事になったかについての経緯を三浦氏を大伯父とする原誠氏の論文を中心にふれてみる。

「三浦襄は，明治21年８月10日，東京都神田区猿楽町に父宗三郎，母恵子の次男として生まれた。父宗三郎は日本基督一致教会の牧師であった。（中略）明治19年宗三郎は，東京一致神学校での３年間の学びを終え，東京英和一致教会と合同した明治学院神学部の第一回卒業生として，伝道の道を進むことになった。母恵子は，父内田十作，母はま子の長女として明治元年11月23日姫路藩江戸藩邸で生まれた。恵子の母はま子は，日本のバプテスト派の最初の受洗者である。（中略）父は一代目クリスチャンで牧師，母はすでに二代目である。（中略）母恵子は幼時より外国人宣教師家庭で育ち，最初期のキリスト主義女子教育を受け，明治21年には英語教師試験に合格し，訓導になり，また基督伝をを翻訳したり，通訳をするような女性だった」(34) と言うようにプロテスタントのキリスト教の家庭に育った三浦氏は，明治35年父の秋田教会四代牧師としての赴任に従い転居するのだった。

明治38年11月，父のハワイ日本人教会赴任に伴い早稲田の学生の兄，弟，妹５人の一家は東京都港区の明治学院の近くに引越し，彼は同学院に編入するのだった。そして，「明治38年３月６日に，襄は父宗三郎の手によって，３名の青年と共に洗礼を授けられた」(35) と言われる如く，既に，16歳の時に洗礼を受けていたのである。

「日清・日露両戦争を経て，日本の権益が大陸，台湾に拡大されるや，日本のキリスト教各派は植民地伝道を開始したが，それらは，植民地化の問題と植民地国民のナショナリズムについて複雑な問題を内在させていた。それらの教会は日本人のために設立されたものが多い」(36) と言う指摘に見られる様に，欧米諸国に「追いつくこと」を国是とする日本は，両戦

写真５
明治学院大学

争を経験する事を以て欧米の仲間入り気分を味わい，それに倣い海外進出を活発化するのだが，その背景としての国民を養い得る事が難しいとする国内問題があったのである。それは，更に，第一次大戦の結果，ドイツ領だったマリアナMariana，カロリンCaroline，マーシャルMarshall諸島等が，「信託地域であるが受任国領土の構成部分としてその国法のもとに施政を行う」と言う条件の下に，「南洋諸島委任統治」地となる事によって日本の「南進策」が，これ迄の「北進論」とは別に重要な施策となって来るのだった。

こうした趨勢の中，「『(恰も其頃米国では日本移民排斥問題が盛んになって，海外に発展せんとする我青年の行き場に困って居たので)，自分は従来の智識を茲に活用して此の国家的困難を救済し，一面正しき営利を以て日本の伝道を助け，自分にも同胞にも精神的満足な事業を起さう。之こそ神に対する唯一の謝恩である』と考えたのである」[37] と指摘される，東京都千代田区の富士見町教会に出入りしていた35歳の堤林数衛氏が設立した「南洋商会」に明治42年１月，20歳の三浦氏は卒業間際の学校を退学して入るのである。

写真６
富士見町教会

この「南洋商会」では，「『伝道と商売』という，その意味で実利的というよりも，精神的な使命観に基づいた目的意識があった」[38] と言われる性格の強いもので，それは，「一，午前六時迄起床礼拝食事私用一切を済す事　一，七時開店午後九時閉店正午一時休息私の時間と定む　略　一，業務以外に於て協同的にして上下なく真の兄弟たる誠情を表はす事　一，教会教友家族友人の通信を勉むる事　略　一，可成集会を開き精神の修養に信仰の向上を期する事」[39] と言う同志的結合の強いものだった。「堤林自身は南洋商会の設立を神からの召命と信じ，それゆえに同志的結合を計って，厳しく青年を指導した」[40] と指摘される現実を伴ったものであり，その背景には「彼らは，『一人の邦人と雖も過ちを犯さば祖国を傷つけ邦人全体の面目に関したので，日々緊張の生活であり，安易偸安は禁物』という自覚と責任を持ち，「自分の背中には『日の丸』の旗がある」という気持ちを持っていた」[41] と言う，単に，「利」を求める商人としてではなく，日本と言う国の代表と言う気概を持った堤林氏の考えが存していたのである。

こうした在り方を以て全員クリスチャンの15名の中に三浦氏もおり，一行は横浜から「神奈川丸」で出帆，門司，上海，香港，シンガポールを経て，５月13日に目的地のジャワ（島）中部のスマランに到着，翌日，テーブル一脚で開店，行商を開始するのだった。

「堤林がジャワ島スマランを選んだのにはいくつかの理由がある。先ず42年２月にやっとバタビア（現在のジャカルタ）に日本領事館が開設され，正式な海外渡航が認可され，法的保護が受けられるようになったことと，次に郭河東公司の支店があり，堤林が30年代に一度ならず訪れた経験があったこと，および小川利八郎という先住の日本人がおり，その小川の姉の北原哲子は，牧師未亡人，という因縁があったことと，さらに，堤林自身が，過去10年間台湾を中心に，南洋で生活した経験を通して中国人，印度人などの現地の経済状況等を熟知し，日本製品がこの地域に適しており，人種，人情，風俗，宗教などの文化的背景に共通理解を持ちうると考えられたこと，さらにまたこの地域は，開拓の余地が充分にあることであった」[42] と言う理由ににによってであったと言うのである。

ここに我々は，当時の日本人の海外進出，雄飛の一例を見る事が出来ると言えるのである。

こうして，「南洋商会」の一員としてインドネシアに渡った三浦氏達だったが，「そもそも日本人の『南進』は，娘子軍によって，明治初期から開始されている。彼らを『南進』の第一段階として位置づけることができる。とりわけインドネシアの場合は，娘子軍と共に，売薬行商が多かった」[43] と言う指摘に見られる如く，彼（女）等を「第一段階」と見るとすると，堤林氏，三浦氏達は「第二段階」の日本人と言われているのであって，彼らは，「この第二段階に南洋に渡った日本人は，自他ともに日本人が一等国民であることを証明するために，娘子軍たちを国の恥として，彼らの存在を疎しく感じるとともに，日本のために，近代的企業経営を目指すようになった。南洋商会の『南進』は，まさにこのような時期だったの

である。その意味で，南洋商会の『南進』は，歴史的に大きな意味がある」[44] と言う記述に従えば，「一等国民」としての気概を強く持っての「南進」だった事が知れる。

「一等国民」としての気概を示し「南進」した者達は，「日本人は，支那人と間違われやすいため，若い青年でも何れもカイゼル型の美髭を蓄え，カンカンの麦稈帽子かヘルメットを載いて，洋服は全てオランダ人同様に詰衿の五つ釦を，この暑い熱帯で着用していた。メリヤスやステテコでの姿ではなく，注意を払って日本の体面を重んじていた。苦心の体が窺われるのである。体裁ばかりでなく，対人関係に於ても反感を持たれないように自重していた」[45] と言われる様に，心身共に常に注意を払っていた事が知れる。更に，「大正年間以後の三浦の写真を見ても，常にネクタイをしめている」[46] と言われるものだったのである。

こうした服装，言動を「一等国民」として相応しい気概を以て「南洋」に進出した日本人の中で堤林氏は，更に，「神に対する謝恩」を常に意識したもので，「信仰とそれに基づく伝道の実践，およびその表現の場としての経済行為という基本構造をもっており，この信仰と商売の間に，矛盾も破綻もなかった」[47] と見られているのである。

しかしながら，三浦氏を含む５人の若者達がスマランに着いて約半年後の明治42年12月には南洋商会を脱会するのだった。

その後，「南洋商会は三浦たちの脱会後大幅な組織の変更をおこなった。それは残された青年達の要求でもあったが，設立の趣旨であるキリスト教の看板を降ろし，堤林は，自らを雇用者，経営者として，青年達は使用人という立場になった。そして，第二次，第三次の商会員を増員し，大正７年頃には社員127名位まで増え，華南銀行，南洋倉庫を設立するなど成長した」[48] と言われるものだった。こうした堤林氏の言動から当時の「南進」を目指す者達の在り方の一端を知る事が出来るのである。

一方，三浦氏のその後については，「南洋商会を脱退した三浦は，南洋の各地を流浪した。三浦が戦争中に書き残した『履歴書』には『明治42年12月，同志５名と南洋商会脱会，後バリ Bali ロンボック Lombok スラバヤ Surabaja 各島を視察』となっており，この期間の詳しい正確なことはいっさい判明しない。ただ，それに続いて『大正１年12月，セレベス Celebes 島マカッサル Makassar に移り，同地に雑貨，小売業を開業』となっている」[49] と言われるのである。

そして，「大正５年には日本に帰国し，目沢民子と結婚した。司式は父宗三郎であった。（中略）三浦は27歳になっていた」[50] と，また，「妻を迎えることのできる精神的経済的状態に向かいつつあったのではないだろうか」[51] とも言うのである。

その後，「大正７年２月に彼は鶴間春二とと共同出資で『日印貿易商会』を開業した。（中略）日印貿易商会は本店をセレベス島マカッサルに置き，４カ所に支店および出張所を持ち，業務内容は，南洋における通商貿易，栽培漁業，製油，採鉱造船となっている。（中略）他

の個人日本人商社と比較して特に大きくはなく，ほぼ中型規模である。（中略）第一次大戦後の好景気を背景に，順調に経営を伸ばしていったものと思われる。三浦は，セレベス島マカッサル日本人会（会員数140名，うち男118）の理事となった。この時期が三浦にとっていわゆる実業家として最も順調な時期であった。しかし，（中略）共同経営者鶴間春二が，たまたま三浦の帰国中，大正14年頃，マカッサルで強盗に襲われ，資金を奪われて殺害されたことにより，日印商会は解散した」(52) と，彼の事業について言われるのである。

その後，奥地のトラジャ Toradjaでコーヒー園の経営をするが，この間，妻の民子を過労で亡くし一男二女が残されるのだった。

昭和３年３月，仙台の尚綱女学校教師横山しげと再婚するが，世界的不況でコーヒー園の経営に失敗，昭和５年11月，バリ（島）へ転居，デンパサールで自転車店を営む事になるのである。「40を過ぎて自らが手広くやる事業が得手でないと判断したのだろうか，細々と地味に，毎日自宅で仕事をした。そして昭和８年には，子供達の教育のために，４女の出産を機に，家族を全員仙台に送りかえした。

三浦の家は，表が店で裏が住宅になっていた。この頃の写真を見ると，自転車修理という汚れる仕事であり，熱帯であるにもかかわらず，きちんとネクタイを締めている」(53) と言われるものだった。

そして，「日露戦争以来日本人は，オランダが宗主国であるこの蘭領東印度において華僑らは二等国民であるとして入れなかったサロン等に，欧米人と共に一等国民であるとして入れたという。そして三浦は，バリ島に定住した最初期の日本人であり，経済的にも社会的にも非の打ちどころのない位置におり，そのうえバリ人の生活に密着した自転車業を営み，ある場合には計算抜きで仕事をするようなパーソナリティであったがゆえに，名実共にバリの日本人を代表する存在になっていたのである」(54) と言われるように，一等国民と植民地社会で認められながら，彼の日常生活は地元民に密着していたものと言えるのであり，筆者旧知のドクター・グデ・グリアも幼少の頃三浦氏に可愛いがられたと言っていた。

こうした時期の一時帰国の中で，海軍との関わりを持つ事となり，先遣隊とも言うべき陸軍部隊の上陸に際し，道案内，通訳として関わった事により，日本軍との関わりを強めて行くのだが，その間，彼にはバリ（島）の人々のためにどうしたら良いかと言う事に心を砕く事で一杯だったのである。

結

以上，「バリ島の父」と言われた三浦襄氏のバリ（島）における活動を，日本の軍政との関わりで考察を試みて来た。

そこには，当時，蘭印（オランダ領インド）と言われたインドネシアにも日本人が渡航，

主として商業に携わり，三浦氏もその一人として活動していたのだが，国策である「南進論」と，それに伴った「大東亜戦争」において日本（人，軍）とバリ（島）の人々との間にあって奔走する三浦氏の姿があったのである。

ロシアの東進策と日本の中国大陸への野心との衝突が日露戦争を引き起こしたのであるが，これは，日本の大陸への進出を更に強め，以後の拡大策，帝国主義政策推進を確固たるものにするのだった。

そして，それは，一方では，欧米による植民地主義・政策の下に呻吟して来たアジア諸地域の人々に希望と勇気を与え，彼らに独立を考えさせる事にもなったのである。その点で，背景にキリスト教の布教を伴いながら世界を席捲して来た白人の支配を，同じ有色人種である日本人がこれを打ち破ったとして，多くのアジア人に強い感動と希望を与えたと言う事にもなるのである。

そうした事で，大東亜共栄圏構想や，それを土台とした大東亜（太平洋）戦争，満州帝国とそれに伴った五族協和と言った日本（人，軍）の遂行した政治（策）は，当初，アジアの人々の中に，これに積極的に同調，協力する者も少なからずいたわけである。

従って，戦争当初，ジョヨボヨ伝説を持つジャワ（島）を中心にインドネシアでは積極的に日本（人，軍）に協力するのだった。

だが，日本軍の持つビンタが日常茶飯事である事に象徴される在り方や，大東亜共栄圏構想も日本が指導者であるそれを知る事で以て，それは色褪せ，更に，戦争の趨勢が日本（人，軍）に不利になって来ると，戦争遂行のためにそれ迄は比較的寛大だった対応も厳しいものとなり，それは，後に，アジアの諸地域において戦争犯罪人を生むと言う事にもなるのであるが，インドネシア，バリ（島）においても例外ではなく様々な齟齬を生じるのである。

こうした状況の中で三浦氏はバリ（島）の人々のために思いを致し活動するのだが，結局，それは，彼の思う思いの通りにはいがず，そのために，彼は，それを恥として自らの命を絶つ事で以て償うのだった。その詳しい経緯については今後の考察とするところである。

本稿執筆に当り淑徳大学図書館職員に多大な協力を得た。多謝。

注

（1）桜の花出版編集部『インドネシアの人々が証言する日本軍政の真実』 桜の花出版　2006　67-70頁
（2）同上書　232-3頁
（3）同上書　228頁
（4）同上書　127-9頁
（5）同上書　150頁でハッサン・ラハヤ氏が，一緒に広島文理大学へ留学したもう一人のスマトラ（島）出身のアリフィン・ベイ氏の名前をあげているが，平成22（2010）年9月5日付朝日新聞

に85歳で亡くなったとの赴報が掲載されていた。同氏は帰国後大学教授の職にあったと言う。
（６）同上書　112-3頁
（７）インドネシア国立文書館［編著］　倉沢愛子：北野正徳［訳］『ふたつの紅白旗　インドネシア人が語る日本占領時代』　木犀社　1996　011頁
（８）同上書　011頁
（９）同上書　011頁
（10）同上書　105頁
（11）桜の花出版　前掲書　226-8頁
・この点について，また，「『一九〇五年に日本がロシアを破ったことは，アジア人もまた西洋をうちまかすことができるほど強くななれるという信念を強化させた。それ以後，インドネシア人は，大国として発展する日本にいっそうの注目をそそぎはじめた。』こうして，他のアジア諸国におけると同様，日露戦争の意味は，インドネシアでも，注視されるようになったのである。この“アジア人”の勝利を象徴する出来事ほど，日本のイメージをインドネシア人の心に強烈にやきつけたものはなかった」（Kanahele, G.S., *The Japanese Occupation of Indonesia: Prelude to Indpendence* 1967　後藤乾一　近藤正臣　白石愛子訳『日本軍政とインネシア独立』　鳳出版　1977　３頁）とも言われているのである。
（12）Sumantri. R.H.I.K., *Autobiography dar i Prof. Iwa Kusuma Sumantri* 1971 Stencil　後藤乾一訳『インドネシア民族主義の源流』　早稲田大学出版部　昭和50　９頁
（13）産経新聞記事「凛（ママ）として　189　バリ島の父　三浦襄　自決」（平成17＜2005＞年２月７日＜月＞付）
（14）防衛庁防衛研修所戦史室『蘭印・ベンガル方面　海軍進攻作戦』　朝雲出版社　昭和44　325頁
（15）「凛として　192　解放」（２月10日（木）付）
（16）原誠「日本人キリスト者三浦襄の『南方関与』―信徒のキリスト教受容に関する一考察―」『東南アジア研究』　16巻　１号　1978年６月　53頁　三浦氏は原氏の大伯父にあたる。
（17）「凛として　191」（２月９日（水）付）
（18）「凛として　192」
（19）原　前掲論文　55頁
（20）同上論文　55頁
（21）「凛として　192」
（22）「凛として　192」
（23）原　前掲論文　59頁
（24）同上論文　56頁
（25）同上論文　55-6頁
（26）河野恒雄「―証言16―司政官のみたバリ社会」　インドネシア日本占領期史料フォーラム［編］『証言集　日本軍占領下のインドネシア』　龍溪書舎　1991　667頁
（27）同上証言　667頁
（28）同上証言　667-8頁
（29）戸川幸夫『昭和快人録』　新人物往来社　昭和50　241頁
（30）同上書　264頁
（31）同上書　265頁
（32）同上書　265頁
（33）原　前掲論文　62頁
（34）同上論文　38-9頁
（35）同上論文　42頁
（36）同上論文　45頁
（37）同上論文　45頁
（38）同上論文　49頁
（39）同上論文　48頁

(40) 原　同上論文　50頁
(41) 同上論文　48頁
(42) 同上論文　47頁
(43) 同上論文　48頁
(44) 同上論文　48-49頁
(45) 同上論文　49頁　脚注
(46) 同上論文　49頁　脚注
(47) 同上論文　50頁
(48) 同上論文　52頁
(49) 同上論文　51頁
(50) 同上論文　52頁
(51) 同上論文　52頁
(52) 同上論文　52頁

・これに関連して，「日本商品は大河のように流れこみ，一九三三年，日本からの輸入は，総輸入の三二パーセントを占めた。一方，オランダからの輸入は九・五パーセントに急落した。日本商品はオランダ商品とくらべ，安いのでインドネシアで人気を博した。その上，日本人のインドネシア市場に対する深い知識，それに買手側の心理も手伝って，日本人は“この地方の市場からヨーロッパ製品を駆逐するのに成功したのである」（カナヘル　前掲書　4-5頁）と言われるのである。

(53)　同上論文　53頁
(54)　同上論文　55頁

Research Note

The Social Climate and Lineage in Bali

Masamichi MATSUBARA

This time I try to research about the millitary government of Japan in Bali.

In this essay, esspecially, I consider of Mr. Jo Miura who works between Japanese（soldier）and Balinese for their good relationship.

But, it is difficult to keep a good relationship, because, there are many problems between Japanese（soldier）and Balinese. So, he are worried.